

外国人に対する自らの偏見に気付く子ども
～出会いと振り返りに焦点を当てた4年生の人権教育の実践から～

名古屋 康秀（新潟県・三条市立栄中央小学校）

1 はじめに

子どもたちは、差別や偏見はいけないと理解していても、自分の生活とのかかわりから差別や偏見を捉える意識は低く、軽率な行動をとるといった学校教育上の課題があった。一例を挙げると、外国語活動「世界のあいさつ」の学習で映像を見たとき、肌の色や服装、振る舞いに対して差別的な発言があったり、「背が高い」・「肌が黒い」など外見を根拠に、外国人に対して「怖い」というイメージをもつ子が複数いたりした。

知識的理解はできているものの、実生活に反映されないことが筆者の教育実践の課題である。自身の実践を振り返り、筆者は、子どもたちが自分自身を見つめ直し、自分の言動が差別や偏見につながっていたことに自ら気付いてほしいと強く思う。子どもたちが事象に対して自分ごととして捉えたり、自分にできることを考えたりして、かかわろうとする子になってほしい。

本研究では、「外国人」に対する人権課題を取り上げ、事象を自分ごととして捉え、自分を見つめ直し、かかわろうとする態度の育成を図るための単元構成を模索することを目的とする。先行研究で得た知見を活かし、「振り返りと一体化した体験的な学習」と「段階的に指導する順序性」を重視した授業づくりを行う。

特に、事象との出会わせ方を工夫し、子どもたちが外国の方と交流する「体験的な活動」を行う。子どもが事象に対してかかわろうとするような手立てを構想し、子どもが自分を見つめ直し、自分の偏見に気付けるような場を設定する。このような一連の単元開発を行うことが、筆者が願う子どもの姿に結び付くものと考えている。

2 発表の概要

- (1) 単元名 「自分が変わる、世界も変わる。」
- (2) ねらい
 - ・ 外国人との直接的な交流を通して、今までもっていた自分の偏見に気付く。
 - ・ バングラデシュの子どもの実態を自分ごととして捉え、自分を見つめ直し、かかわろうとする。
- (3) 学習時間 6月1週～7月5週
- (4) 対象児童 4年生 28人
- (5) 単元の指導計画（総合的な学習の時間10時間、道徳1時間、社会科1時間 全12時間）

事前活動	
[総合的な学習の時間] 1時間 外国人のイメージマップの作成・アンケート調査	
↓	
総合的な学習の時間	
3時間	小单元名 【新発田市のアジアン・エスニック料理店】 学習活動 ○ HPに載っている新発田市のアジアン・エスニック料理店を調べる。 ○ どの国の料理が多いかを明らかにする。 ○ 料理店を出している理由を考える。
2時間	小单元名 【新潟県・新発田市にいる外国人】 学習活動 ○ 市役所に直接電話して、在日外国人の人数と国名、在日理由を確認する。 ○ 新潟県に住む国際結婚したAさんを紹介する。
4時間	小单元名 【Aさんと交流】 学習活動 ○ バングラデシュの国や文化について調べる。 ○ 直接話を聞く。一緒にカレーを作って食べる。手で食べることの理由を知る。 ○ バングラデシュの実態と学校設立の活動について話してもらう。
↓	
事後活動	
道徳1時間	【働く少女 ルビナ】 学習内容 ○ バングラデシュで家事使用人として働く少女について知り、自分たちの生活と比較して考え、自分たちにできることを考える。

3 活動の実際と考察

(1) 外国人(Aさんに)に親しみを持ち、バングラデシュを自分ごととして捉えるようになった体験的な学習

Aさんは、33年前に技術士として来日した。空手は範士となるほどの腕前で、県内各地で道場を開いている。故郷バングラデシュ・ナマプティヤ村に学校がなかったことから、学校設立に向けた「アジアンマザー草の根運動」の活動を始め、2017年に学校を設立した。その活動が称賛され、2019年、人材育成に大きな成果をあげた人に贈られる長岡市の米百俵賞を受賞した。数々の取材やテレビにも出演し、多忙な日々を送っている。



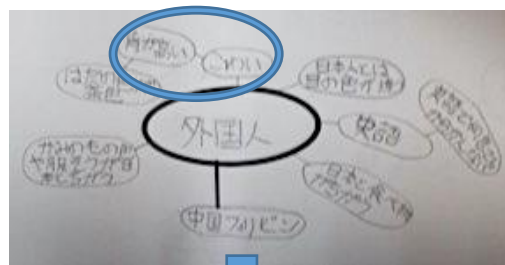
写真1：Aさん夫妻

Aさんが、一番力を入れている活動は、国際理解教育の推進である。日本の子どもたちが異文化を体験的に理解し、自分たちの今の生活に感謝できる子になってほしいと願っている。また、Aさんは、活動で集めた資金を故郷に送り、学校運営維持費に役立っている。

交流会当日、Aさんは笑顔で登場し、やさしく子どもたちに語りかけ、時折ジョークも交えながら楽しく話をしてくれた。子どもたちはAさんの魅力的な人柄に引き込まれていった。(写真1)

(2) イメージマップ作りで、外国人に対するイメージが変わり、自分の偏見に気付く子ども

事前活動として、子どもたちが外国人に対するイメージを可視化する「イメージマップ作り」を行った。教師が「外国人と聞いて頭に思い浮かぶことを書こう。」と伝えたら、C3は、次のようなイメージマップを作成した。



最初に出てきた言葉は、「こわい・日本人とは目の色が違う・英語・食べ物が違う・中国フィリピン・髪の色・服装が日本と違う」であった。筆者は、更にイメージしたものを加えること、記述の理由を添えるよう伝えた。すると、C1は「こわい」の理由を「背が高い・肌の色が茶色」と記述した。C3は、「目の色・背丈・肌の色・髪・服・食」など外見や食の違いのみ注視するC3の状況が伺える。

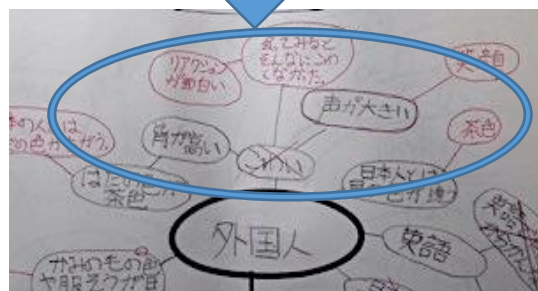


写真2：C1のイメージマップの変

Aさんとの体験的な学習を行った後、外国人に対するイメージについて再度考え、イメージを更新する活動を行った。筆者は、イメージが変わったものについては赤鉛筆(×印)の修正を入れるよう、イメージが広がったものは赤鉛筆で加えるよう伝えた。C1は「こわい」を消して、その理由を「会ってみるとそんなにこわくなかった。」「声大きい。」と書いた。さらに派生して、「リアクションが面白い、笑顔」と具体的に書き加えていた。(写真2)

今までは外見による違いにこわさを感じていたC1が、実際にAさんと交流し、Aさんの人柄・性格・内面から表出するものを受け取ったことをイメージマップに反映させていることが分かる。

次時、筆者は、根拠なく「こわい」というイメージをもつことを「偏見」と教え、偏見の恐ろしさを、Aさんとのかかわりから学んだように「自分ごと」としてかかわる大切さを全体で確認した。

4 成果と今後の課題

自分の偏見に気付く子どもを育成するための教材開発と単元構成、手立てや支援の有効性と課題を明らかにした。

子どもに身近なものから外国につなげ、事前に調べ学習を行って出合いの期待感を高め、さらにAさんから直接話を聞いて異文化体験をするという一連の流れで授業を構成したことで、始めは遠かった事象を自分ごととして捉え、かかわろうとすることに有効であった。イメージマップを用いて以前の自分と今の自分を比較する活動は、自分を見つめ直し、偏見をもっていたことに気付かせることに有効であったと結論付ける。

複雑化・多様化する人権問題に立ち向かえる人権感覚を身に付け、解決に向かってともに歩む子どもの育成が急務である。外国人への偏見に加えて、差別という人権問題に対して「憤る」・「差別を許さないと決意する」・「立ち上がる」というかかわる姿の高まりが今後求められる。自分の偏見に気付いたら、偏見をしないように心がけ、実践する子どもの育成は、こうした実践の継続的な積み重ねによるところが大きい。そのために、本研究で明らかにした思考過程をもとに、人権教育や同和教育における思考過程、単元開発を行うことを今後の課題とする。